

斎藤栄

長編推理小説

# 横浜 死の 広場

スクエア





光文社文庫

長編推理小説

よこはま し スクエア  
横浜 死の広場

著者 さいとう さかえ  
斎藤 栄

2003年11月20日 初版1刷発行

発行者 八木 沢 一 寿  
印刷 慶昌堂印刷  
製本 明泉堂製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Sakae Saitō 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73582-7 Printed in Japan

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編推理小説

スクエア  
横浜 死の広場  
『クイーンズスクエア 横浜のロリス』改題

斎藤 栄



光 文 社



## 目次

|      |                              |     |
|------|------------------------------|-----|
| 第一章  | 純愛の女                         | 5   |
| 第二章  | バスタブの中の死体                    | 25  |
| 第三章  | 怪しい人々                        | 49  |
| 第四章  | 船乗りシンドバッド                    | 73  |
| 第五章  | 高瀬村つとむ                       | 97  |
| 第六章  | 万引きカメラ                       | 119 |
| 第七章  | 捜査員                          | 141 |
| 第八章  | 尾行                           | 162 |
| 第九章  | 愛の獣                          | 187 |
| 第十章  | 廃船                           | 211 |
| 第十一章 | 冷たくなつたぼく                     | 233 |
| 第十二章 | 孤独な影                         | 254 |
| 解説   | 影山莊一 <small>かげやまそういち</small> | 279 |



## 第一章 純愛の女

### 1

毎朝新聞社を依願退職した<sup>かしわぎ たいよう</sup>柏木太陽は、辞めてしばらくは軽井沢に行ったり、あるいは関西に足を向けたりして、日本のあちこちを歩いて放浪者のような生活をしてきた。その彼が、今回足をとめたのは、横浜であった。以前、勤務していた頃、横浜に来たこともあるが、久しぶりに自由な身になって、この地に来てみると、しばらく来なかったうちに横浜はすっかり様<sup>さま</sup>変わりしていた。

JRの桜木町の駅に降り立った太陽は、大きく深呼吸をした。

へああ、ここは自由のにおいがする

と、心の中で<sup>つぶや</sup>呟いた。

目の前に広がっているM<sup>みなとみらい</sup>M<sup>21</sup>地区、そこには、日本で一番高層の建物として知られているランドマークタワーがあり、そしていくつかのホテル、あるいは事務所の入ったビルが林立し、かつてドックがあつた頃とはまったく様変わりしていた。明治の時代にここに新橋―横浜間の鉄道が敷かれ、開港された当時の、あの自由で、諸外国からの窓口として多くの文明あるいは文化を取り入れた場所に、また甦<sup>よみがえ</sup>つたような雰囲気があつた。

太陽は、歩き出したが、すぐには巨大なランドマークタワーのほうには行かず、やや右寄りの道を通つて、そこにある「汽車道」に出てみた。汽車道というのは、開港同時に作られた新橋―横浜間の鉄道を記念した形で、今でも軌道が残されており、散策にこよなくムードのある道として再び作り出されているのだつた。

むろん、実際の汽車は走つてはいないが、涼やかな感じで伸びたその道は、途中に「アメリカン・ブリッジ・カンパニー・オブ・ニューヨークUSA一九〇七年」と書かれた鉄橋もかかり、往時を偲<sup>しの</sup>ばせるものがあつた。

アンツーカーのような赤茶色の道に、その灰色の鉄橋がよく映えた。太陽の足もとから、巨大な観覧車へコスモクロック21のほうに向かって伸びる水路の中には、一羽のウミウが泳いでいた。そのウミウは、頭から海面下に潜ると、中でエサを求めて泳ぎ廻り、それからサツとその黒い軀<sup>からだ</sup>を水面上に浮かばせた。

水の中でも、あるいは空中でも、自由に一羽で動き廻る姿は、まるで今の太陽の状況を象徴しているようにさえ思われた。カモメも何羽か姿を見せた。しかし、白いカモメよりも黒い一羽のウミウの姿の方が、自分にふさわしいような気が、太陽にはした。右手には帆船日本丸の姿があった。

太陽は、その道をゆつくりと歩いた。ところどころにベンチが置いてある。水門のゲートの方角から、何の曲かはつきりしないが、音楽が流れてきた。鉄橋の上には、アルファベットの様々な落書きが書かれている。日本人が書いたのか、あるいは外国人が書いたのかはわからなかった。ベンチの下では二匹の猫がじゃれ合っていた。そういう自然の姿もまた太陽には、心安らく微笑<sup>ほほえ</sup>ましいものに思えた。

へそうだ、これが今の横浜の本当の姿なんだ

と、太陽はあらためて思った。

これまで横浜のシンボルというと山下公園とか、そこにある赤い靴はいてた女の子像とか、そういう景色がシンボリックに思われていたが、今はもうすでに機関車が走っていないこの汽車道と、そこから運河を越えて向こう側に見える多くの高層な建物、そして赤、緑、オレンジ、ブルーといったゴンドラの色に象徴される様々な色彩のめくるめくような配置が、日本人ばかりでなく、アジアの人やあるいはアメリカ人、ヨーロッパ人などがや

つてくる国際コートという姿を象徴しているような気がした。

太陽は、運河を大きく左へ迂回し、駐車場のところから「ブラーノストリートゾーン」へ出た。そして、国際橋の上から「パシフィコ横浜」と変わった形のホテルの姿を見ながら、ちょうど裏手を通るようにして、「クイーンズスクエア横浜」へ向かった。

ここは国際大通りと呼ばれ、右手に臨港パークがあつた。その先が「パシフィコ横浜」で、それを左折すると「クイーンズスクエア横浜」と、やがて完成する「地下鉄みなとみらい」の中央駅に行くことができるのであつた。

太陽は、辺りを物珍しく眺めながら、クイーンズスクエアの巨大な建物の中へ入った。

## 2

太陽は、なぜ毎朝新聞社を辞めたかと、よく知り合いから訊かれるが、実は今でもハッキリしたことは言えなかつた。ただ、江波という文芸評論家が自殺したことに對して、その事件を毎朝新聞社の小宮山副社長が、

「あの死は単に美しいというだけではなく、もう少し文芸的な観点から論評すべきだ」というようなことを言っていたとき、そばにいた太陽が、

「いや、あれは理屈抜きに、むしろ感覚的に、奥さんが亡くなったあとを追って夫が自殺するというのは、やはり「美しい」というひと言で語るべきではないでしょうか」

と、強調したことがあった。

そのとき、小宮山副社長も太陽も、両方とも酔っていたので、たいした意見の違いではなかったはずなのだが、太陽は強硬に、「純粹の美しさというものはあるのだ」というようなことを言い切つてしまい、副社長と感情的に折り合いが悪くなった事実があった。

そんなことで新聞社を辞めたというのは、あとから考えると自分でも解しかねる行動ではあった。しかし、よくよく考えると、新聞記者といつても一種の勤め人にすぎないという自分の身のあり方が、何となく納得できなかったという伏線があつて、太陽は、突如として新聞社を辞めようと決意したのだった。

むろん、その心の奥底には、かねてから考えていた作家になろうという気持ちだが、たまにそういう上役との葛藤かつとうから表面に浮かび出てきただけのことかもしれないが、正直なところ、自分でもなぜそういう形で辞めなきゃならなかったのか、ハッキリ理解できなかったと言えなかった。

副社長と言ひ争つたときは、著名な文芸評論家だったその男が、妻への愛ということできつぱり死を選ぶということに、若い太陽を感動させるひとつのモチベーションがあつた

のは、確かである。

だが、他人から、

「どうしてあんな大きな新聞社を辞めたんですか？　べつにリストラにあつたわけではないんでしょう？」

と、聞かれると、

「ええ、そういうことはありませんけど……」

と、言葉を濁し、

「じゃあ、どうしてお辞めになつたんですか？」

重ねて問われると、太陽としては、その文芸評論家の自殺ということを、自分の退職に結びつけるのは、どうも釈然としない気持ちが残ってしまうのだった。ただ、そのときに交わされた「美しい」という言葉が、なぜか太陽自身の心の中に何度も思い起こされる。

今の世の中は、人間が何か行動を起こすときの原動力は、金銭的なもの一本にまとまつてしまっているような気がする。美しいということに対する憧憬しょうけいから死を選ぶというようなことはあまり考えられていない。それに太陽自身が反発したのではないかと、自分で分析してみたりしていた。

太陽もすでに三十一歳五カ月という年齢になつていて、自分は若者だと思つていたが、

年齢<sup>とし</sup>下の者を見ると、なんとなく分別くさいことを言いたくなるのに気づいた。

へこのままでは、小説家になる前に老いてしまうへ

そんな焦りもあつた。

そして、太陽の放浪の日々が始まったのである。

毎朝新聞社は、充分とは言えないが、それなりの退職金を払ってくれたので、それを手にした太陽は、作家になるための修行をしようとしてあちらこちら転々と旅しているのだつた。

そして今、横浜に来て、このMM21の巨大なビル群、ベイブリッジの彼方<sup>かなた</sup>に広がる東京湾、多くの外航船などを見てみると、新しいものの美しさや新しいものを求める心というのがそこに充滿<sup>そんたく</sup>していて、これが横浜開港のときの雰囲気だったのだらうと太陽は忖度したのであつた。

### 3

太陽は、このクイーンズスクエアに一步足を踏み入れたときに、ここで何か小説の材料になるものをきつと自分は手に入れることができるという確信に似た気分を覚えた。

一階のへP<sup>パンパシフィック</sup> Pホテル横浜の脇を通り、クイーンモールのフロアをずうつと南の方へ向かつて歩いた。そこをどんどん行くと、また桜木町の駅の方角に行くことができるのである。

そして、太陽は、クイーンズタワーBのところ、ちょうどヘアット！<sup>ファースト</sup> 1stという場所から二階へのエスカレーターを上った。そして、クイーンズイーストとクイーンズタワーAのところで、またもとのP Pホテル横浜の方へ戻るべく北に向かつて歩き出した。

クイーンモール街のフロアが広々と広がっている。そこには若い二人が手を取りながら歩くに相応<sup>ふさわ</sup>しいムードが溢<sup>あふ</sup>れていた。ヘクイーンズスクエア横浜の青いフラッグが目に入り、そしてさらにヘクイーンズイーストの黒に白い文字が目に入った。ここには、クイーンモールのヘデイズニーストア<sup>ア</sup>があつたりして、青年男女が長く止<sup>とど</sup>まっていたいようなムードがあつた。シースルールのエレベーターが上り下りしているところもあつて、本当にそこには自由な空気が漲<sup>みなぎ</sup>っていた。

東のほうに出ると、その場所がクイーンズパークとなっており、人工の滝が流れ落ちている。そこをちよつと覗<sup>のぞ</sup>いた太陽は、戻つてインフォメーションのところで、クイーンズスクエアのフロアガイドをもらった。そこは、かつて太陽が訪れた頃、まだこのクイーンズスクエアはもろろんなく、インフォメーションの女性がかぶっている白とブルーの帽子

の姿もなかった。何となく、そこから何かが始まるという感じに満ち溢れていたのである。

太陽は、並んでいるいくつかの店を覗いていった。目の前にあるのは、**ヘアット!** 2<sup>nd</sup>と、そして、その反対側にある3<sup>rd</sup>であった。レストランや食堂や**ヘジヨツカーレ**などというイタリアンカフェもあった。さらに**ヘアット!** 3<sup>rd</sup>の方には、スヌーピー・タウンショップやワナーブラザース・スタジオストアなども見られた。

へそうだ、これが横浜なんだ

と、太陽は思った。とにかくここに来てよかったという感じがした。何かを予感させるものがあつた。

すると、このとき、一階のコンサートホールの方から、ひとりの男が急ぎ足でやってく  
るのが見えた。鋭い目つき、そして長い足、白いけれど、いくらか汚れた感じのする白い  
パンツ。それは彼が、いわゆるお洒落<sup>しゃれ</sup>ではなくて、平気でどんなところへでも坐つてしま  
うようなタイプの人間だということを物語っていた。

だが、何よりも太陽が目をとめたのは、その男の左の頬<sup>ほお</sup>に斜めに五センチぐらいの傷が  
あることだった。その傷はそう古いものではないような気がした。ただ、太陽のこれまで  
の経験では、その左の頬に斜めに傷があるということは、普通の転んだりしたときの怪我<sup>けが</sup>

ではなくて、喧嘩けんかでもして、相手から切りつけられた傷跡のように思われた。

へこの男は、何かいわくありげだな

と、思った。

ただ、瞬間的に、その男が太陽を見たときの目に彼は惹ひかれた。目つきが鋭いことは鋭いが、それでいてその中に何か複雑な光をたたえているのである。それは、太陽には何とも表現できなかった。

男は、太陽の傍そばを足早に通り過ぎて、ランドマークタワーの方向に走るようにして去って行った。

へなんだろう……

太陽は首を傾かしげた。ちよつと彼の好奇心が動き始めたのであった。

## 4

このあと太陽は、ヘロイヤルパークホテルニッコーの一階部分を通つて、さらにランドマークプラザの手前から六十九階にある展望台へ上つてみた。この日は、前日によく風が吹いたせいもあつて、西の彼方に見事な霊峰富士の姿を見ることができた。

そのとき、太陽は、昔、横浜が開港された頃、やはり横浜村からも富士がきれいに見えたことだろうかと、感動した。今は、この日本一高い展望台から富士を見ることができて、明治の人間がこの展望台へ上ることがあつたら、おそらくその新しい美しさに酔いしれるかもしれないなどと、太陽は感傷に耽<sup>ふけ</sup>つた。そして、そのあといったん、ランドマークプラザで店を覗き、再びクイーンズスクエアへ戻ってきた。それは、あの頬に傷のある男が、なぜかクイーンズスクエアをウロウロしているような気がしたからである。

戻ってみたが、しかし、それらしい姿はなかった。

再びクイーンズスクエアの二階に行ってみた。様々な店が並んでいる。その中にヘグロ・リアマムーンという輸入品の雑貨を扱っている店が目についた。このあたりの店の店員は、ほとんど二十歳前後の若い女性である。だが、太陽はその中に明らかに三十代後半と思われる年輩の、ちよつと他の店員と違う女性がいるのを見つけた。その女性の方が何かを喋<sup>しゃべ</sup>ってくれそうな気がした。初めは店長かなと思つたが、そういうタイプではなさそうだった。

太陽は、新聞記者の頃の習慣で、ちよつと取材をするということには慣れていたので、その女のそばに寄つて行つた。胸には職員の名が書いてあつた。大林という名が読めた。「あ、大林さん、ちよつと伺いたいんだけど」